日本史Ａ（鵜飼政志）第５回資料と課題（末尾にあり）

幕末の政争

幕末における政争の結果、天皇政権が誕生したという、大正・昭和戦前期あたりに創られた金科玉条の歴史理解は、現在の歴史認識にも影響を与え続けています。その結果、わたしたちは京都中心の政局に関心が集中してしまいがちです。それじたいが間違いではないのですが、朝廷の儀式をふまえた公武の関係などは、当時はおろか現在でも難解なところがあり、はたして知られる史実が真実なのかという疑問があることをあえて述べておきます。ところが怪しい事実でも朝廷や華族（旧大名）が関わるため、語ることがタブー視されてきたからです。その結果、資料じたいが不明になったりしていきます。本当のことを語ってはいけないのです。さて、こんなことを高校生に語るのもまたどうかですね。とても複雑な京都を中心とした政局を、かなり大雑把に語ってみます。

時系列的に語れば以下のようになります。

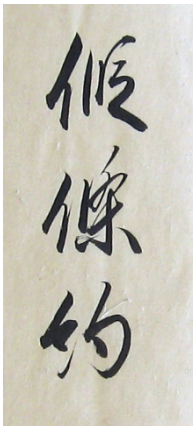
・国事奏上によって自らの主張を確かなものにしようとした阿部正弘政権

～国事奏上の慣習を利用したのは、孝明天皇とその側近たちであったことは既に述べました。和親条約調印から通商条約調印の時期（1855～1858 年頃）には、まだ雄藩大名などの影響は小さなものです。

・条約勅許問題・将軍継嗣問題の浮上→無勅許調印と開港、安政の大獄

～井伊直弼政権がおこなったことじたいが、後の時代によって改竄されています。通商条約調印は、勅許を望んだ井伊の意思とは反対に政局が動いていきます。特に井伊を嫌う水戸の関係者や、それに連なる一部の薩摩藩士などは、さらに京都で徳川幕府、特に井伊大老の強権を批判していきます。彼らのやり方は、将軍継嗣が実現しなかったことや、京都における彦根藩士たちとの熾烈な周旋合戦に敗れたことに対する腹いせというものでした。

こうした状況を粛清したのが京都所司代です。また、江戸でも幕政批判をおこなうものへの弾圧がおこなわれていきます。江戸町奉行の下した捕縛者への裁決は、上層部の指示によってさらに残酷なものになりましたが、その多くは井伊大老の命令だということになっています。ただし、根拠が薄弱（犯科帳（処断者リスト）における罪名が第三者によって書き直されている、これは井伊大老に違いない、など、憶測にすぎない）で疑問の余地が残ります。井伊は条約調印に抗議して無断登城した徳川斉昭らを処罰することで江戸城内の政治闘争を解決しようとしました。また、朝廷に対しては、朝廷と徳川幕府の融和、ひいては公武の融和のため、孝明天皇の妹である和宮を、14 代将軍となった徳川家茂（慶福改め）の正室に迎える計画をたてていました。



他方、貿易活動については、国内（朝廷）を刺激しない態度をとり、勅許が得られなかったことから、通商条約を「仮条約」だということにしています。もちろん、調印国との間にはこうした言い分は通用しません。徳川将軍が条約上の調印者であり日本の主権者にほかなりませんでした。しかし、日本語版は詭弁を弄して「仮条約」であることを貫きました。ゆえに、条約批准書の和文は「仮条約」になっています。右は日英修好通商条約批准書原本の和文に記されている「仮条約」の文字です（F.O.93/492. イギリス国立公文書館蔵）。

桜田門外変後の政局

こうした状況は、桜田門外の変によって井伊大老が暗殺されたことで一変します。暗殺は為政者に恐怖という政治圧力を加える結果になりえます。事実、安藤信正（磐城平藩主）・久世広周（下総関宿藩主）政権は、京都に対して融和姿勢をとり、これが徳川幕府の信頼を失墜させていったと俗説は描きま

す。

たしかに、朝廷が幕府権力に批判的な公家たちの圧力によって、死せし井伊直弼に朝廷の意向を無視したと、その失政を糾弾しました。こうした朝廷の姿勢を恐れ、安藤・久世政権は彦根藩に朝廷の意向を蔑ろにしたとして10万石の領地削減の処分を下しました。さらに、元来、藩主直弼の存在に批判的であった門閥層は、直弼の側近たちを処刑・粛清(しゅくせい)したのです。

安藤・久世政権がそこまでこだわったのは、朝廷との公武一和（公武合体）を推進するためであったといわれます。ただし、こうした視線は一面的です。井伊政権時代

から構想にあった皇女・和宮(かずのみや)の将軍家茂との婚姻を具体的に奏上することで公武一和のシンボルにしようとする一方で、この政権は安政条約によって開始された通商（貿易）利益をもって、徳川政権を強化しようと考えていきました。常備軍としての陸軍創設、さらに軍事品や蒸気船の購入独占権が安政条約によって保証されていることから、海軍をも創設しようとしていきました。そのほかにも、実学（＝西洋の制度や知識）伝習のためオランダに留学生を派遣し、さらに一般の貿易活動も、徳川の御用商人（特権商人）に利益を独占させようと考えました。

ところが、朝廷に対してはこうした権力強化の姿勢と裏腹な態度をとっていきます。なぜなら、和宮降嫁に難色を示す孝明天皇を説得するため、天皇が主張する攘夷実現を降嫁の条件として約束したのです。ただし、そのためには一定の時間（約 10 年）が必要としたのです。これは朝廷を口説く常套(じょうとう)手段でした。そもそも移り気で、政治に関心がない公家は時間が経過すれば、自らの主張すら忘れてしまうか、変節するのが常だったからです。

公武一和・和宮降嫁と朝幕関係の成立

和宮降嫁じたいは、これにより実現します。彼女は、獣の住む関東に行けば食い殺されるとすら主張していましたが、兄・孝明天皇までもの説得（公武一和のため）に泣く泣く関東下向を承諾したのでした。

ここで余談を述べれば、和宮は武家の棟梁夫人となったにもかかわらず、京都から待女らを連れ、江戸城内大奥で京都風の生活を強行し続けました。しかし、年齢の近い家茂とは次第に仲良くなったようで、家茂死去後は京都への帰還を拒んでいきます。王政復古クーデタ後は、自らの京都帰還を条件に徳川宗家存続のための政治工作に協力しています。そして、その後は箱根付近に居を構え短い人生を終えています。彼女の墓は、特例で家茂の隣にあります（芝・増上寺）。

さて、1861 年頃から京都情勢は再び混乱していきます。将軍家茂が、義兄となった孝明天皇に拝謁する目的で京都上洛したことが転機となります。将軍の上洛は三世紀振りのことでした。

若き家茂を、幕政に批判的な公家たちは見事に利用していきます。そして、徳川幕閣を説得して、あらためての大政委任（天皇の命令により、将軍は国内の内政権を委任される）に同意させられました。これにより、長きにわたって徳川の権力内にあったにすぎない天皇の存在は、形式的とはいえ将軍よりも上に位置することになったのです。このことが、幕末の京都政局を生み出していきます。

島津久光の京都率兵上京と幕政改革の要求

ここで突如として島津久光が登場し、朝幕関係を大きく変えてしまいます。久光は、前薩摩藩主島津斉彬(なりあきら)の異母弟です。また、久光の母は、彼らの父・斉興(なりおき)が寵愛(ちょうあい)したお由羅(ゆら)の方です。そして、お由羅の方をめぐって藩内が分裂し、幕府が介入したほどでした。薩摩藩は島津一族が藩政を支配していましたが、斉興は隠居後も権勢を振るっていたことから、彼の寵愛したお由羅を認めるかどうかで分裂したのです。しかし、斉彬・久光兄弟の仲はそれほど悪くありませんでした。特に久光は斉彬を慕(した)い、斉彬が急死した後は、兄の意志を継いで幕政に関与することを考えていました。また、当時の藩主・島

津茂久の実父は久光であったため、「国父様」と呼ばれ、当時は実権を掌握していました。

久光は西郷隆盛を島流しにし、後には明治政府と徹底的に対立するなど世間の印象はよくありませんが、彼がいなければ幕末の歴史はなかった、薩摩の勢力があそこまで政局に介入することはなかったといっても過言ではないはずです。特に久光の功績は、彼自身が側室の子供であり、普通なら政治に関与することはなかったからか、島津一族が支配していた藩行政の改革をまず志します。そして、そのために小松帯刀（ただし彼は島津一族）を側近におき、同時に大久保利通を始めとした有能な下級藩士を抜擢しました。小松ほか抜擢された面々の考えは衝撃でした。兄・斉彬がなしえなかった徳川幕府に対する改革要求を朝廷の意向をかりて実現させ、それをもって島津家の名声を国内に轟かせ、引いては薩摩藩を支配する島津一族の権力を抑制しようというのである。

ただし、どうやって朝廷と接触するのか。婚姻関係のある近衛家との交流があるとはいえ、通常、武士の入京は禁止されています。また、藩主でもない久光がどうやって江戸まで行くのか。まず、入京に関しては近衛家に斡旋を依頼しましたが、迷惑であると拒否されました。しかし、これについては強引に入京することにしました。そのために、あえて武装（鎧・甲冑・鉄砲だけでなく大砲も携行）したうえでの入京を試みました。通常なら、京都所司代との合戦に発展してもおかしくありませんが、京都所司代にも裏工作をおこなっていたと思われ、強引に入京したのでした。1000 名の兵力を連れていたといわれます。

攘夷とは何か

ここで話題を中断して、攘夷の意味と理解方法について言及しておく必要があります。中国の思想である攘夷思想は、文字通り、夷狄（外国人）を追い払うことを意味しますが、非現実的です。当時の為政者（支配者）層は、清国の自己を絶対視する中華思想にならった、ミニ中華思想とでもいうべき世界観を抱くことが通常でした。自己中心的で、絶対的な上から目線だったのです。また、国学に感化された孝明天皇が攘夷論者であったことも大きく関係します。

つまり、ミカドの叡慮（考え）である攘夷をいかに実行するか、同時にそれによって自己の権力や利益を国内に広めていくかに没頭していきました。ゆえに、攘夷の理解は恣意的かつ人によって等しく異なるものとなっていきました。そのため、あえて表現すれば「為政者それぞれの主張する対外政策」ということになりますが、さて理解できますか？少しでも専門が違えば、著名な研究者でも理解できないのが現状です。

通常であれば、為政者の対外策を下級の武士などが語ることは許されません。しかし、近世後期は地域によっては学問が下級の武士にまで浸透した時代です。そのため、書物などで知りえた攘夷こそ、開港以降の混乱のなかで実現させるべきと唱えた武士集団がいても不思議ではありません。薩摩藩の場合、前藩主斉彬が保護したといわれる誠忠組（下級藩士の集団、リーダーは西郷隆盛）などはその典型です。しかし、斉彬の死と久光の台頭をうけて、誠忠組の面々は意見が対立しました。大久保利通のように久光を利用するかのように藩政への関与を志向したものがいる一方で、有馬新七のように即時の攘夷実行を主張して脱藩し、京都でテロ活動をおこなうべきと訴えるものがいました。有馬らの急進派は脱藩し、京都へむかいました。

当時の京都で問題になっていたのは、こうした脱藩浪士たちの暗躍です。治安が悪化していました。入京した久光は、あえて有馬らの粛清を、同じ薩摩藩士に命じます。そして、有馬らのほとんどが殺害されました。これを称讃したのが孝明天皇でした。のちにはっきりするのですが、攘夷論者であったとはいえ、孝明天皇は過激な手段による活動を嫌っていたのです。そして、久光の要望をかなえてやることにしたのです。久光の望みは、江戸行きと幕政改革の要求でした。朝廷は大原重徳を勅使とし、その警固として島津久光一行を江戸に向かわせました。

この年は藩主・茂久の江戸滞在（参勤交代）年にあたりました。財政的な観点から茂久・久光の 2 人が領国を不在にすることはできません。薩摩藩は茂久の参勤交代猶予を願い出ましたが、幕府は難色を示しました。そこで、なんと参勤を不可能にするため、江戸・高輪の藩邸にみずから火をつけ、上屋敷の多くを焼失させるという暴挙にでたのです。そして、このことを口実に茂久は江戸に行きませんでした。

とはいえ、官位もない側室の子である久光を、江戸の幕閣が歓迎するはずがありません。しかし、勅使の従者という立場なのでしぶしぶ一行を江戸城に迎えました。

実際には小松帯刀や大久保利通たちの立案なのですが、勅使、つまり天皇のメッセンジャーである大原重徳を通して徳川幕府に対して以下の要求をつきつけたのです。

・安政大獄での処分者赦免
・一橋慶喜を将軍後見職にすること
・松平慶永（前越前藩主）を政事総裁職（大老より上職）にすること
・参勤交代を緩和すること

このうち、一橋慶喜と松平慶永を幕府機構の新規役職とすることについては、さすがの幕閣も難色を示しました。なぜなら、幕府はあくまで徳川家内の私的な役職にすぎません。朝廷の命令で私的な機関に新規の役職設置を命じるというのは不適切です。そうしたことから、幕閣はのらりくらりと回答を保留していきました。これは逸話にすぎませんが、しびれをきらした大久保たちは、勅使の従者として、幕閣との交渉に同席し、チラリと刀を抜いて脅迫したといわれています。通常なら死罪に相当する御法度行為ですが、勅使の従者です。問題にならなかったばかりか、格好の脅迫が利いていったのです。幕閣は渋々要求を受諾しました。また、一橋慶喜も松平慶永も、薩摩の田舎侍の命令など受諾できないと不快感を露わにしましたが、結局は役職を受諾しています。

松平慶永はほどなく政事総裁職を辞しましたが、一橋慶喜が徳川幕府の役職でもなく、朝廷の意向で与えられた役職を得たことは、幕末の政局に大きな影響を与えることになっていきます。

開港場周辺における外国人殺傷事件の頻発

ここまで為政者たちが解釈・主張するところの攘夷について述べてきました。他方、開港と同時に頻発したのは、外国人に対する殺傷事件でした。そして、犯人は誰一人として判明しませんでした。鋭利な日本刀によって罪もない外国人が殺害される行為は、まさに攘夷の実践だったのでしょうか。イギリス公使ラザフォード・オールコックを始めとした駐日条約国代表は、徳川幕府に猛抗議しましたが、前述のように犯人が逮捕されることはなかったのです。そのため、日本社会全体が意図的に自分たち（＝欧米人）を追放しようとする謀略ではないのかと猜疑心を募らせたほどでした。

どれだけ外国奉行らが懸命に弁明しても、事態は深刻になる一方でした。アメリカ公使館付通訳のヘンリー・ヒュースケンが殺害されるにいたっては、各国代表は抗議のため江戸を退去して横浜に移動したこともありました。さらに 1861 年には、イギリス公使オールコックの命を狙った水戸藩の脱藩浪士たちが、イギリス公使館になっていた高輪の東禅寺を襲撃しています。殺害または自殺した水戸浪士たちは、オールコック夫妻が富士山に登山したことを問題視しての行動でした（斬奸趣意書＝犯行趣意書を身につけていた）。オールコックの恐怖心は最高潮に達し、当初は逆に日本社会を刺激しすぎると軍艦派遣に難色を示していたイギリス海軍も、日本の開港場を定期的に廻航していきます。攘夷は排外主義の実践なのか。オールコックは判断に迷うことになります。数名のイギリス兵が殺害されましたが、同時に幕府の命令で東禅寺を警固していた侍たちも、水戸浪士たちと斬り合いの末、数名が死亡していたからです。結局は、日本国内の混乱状況を改善させるため、条約に規定された新たな開港場の開放を中止もしくは延期したいと懇願する徳川幕府の姿勢に理解を示していくことになります。

その後も、犯人が逮捕されることはなく、犯行動機も不明でした。しかし、1864 年以降、何人かの犯人が逮捕され、処刑されています。彼らは犯行動機について、決してて攘夷実践のためではないと自白しています。混乱する社会のなか、憂さ晴らし、売名行為が犯行動機だと述べ、決して外国人追放などを考えていないとのことでした。

幕末の外国人殺傷事件（開港から生麦事件まで）

陽暦	項目
1859 年 8 月 25 日	横浜でロシア軍艦アスコルド号の乗員 2 名斬殺、1 名負傷。
1859 年 11 月 13 日	フランス領事館員下僕の清国人、横浜で殺害される。
1860 年 1 月 29 日	イギリス公使館通訳伝吉、高輪・東禅寺門前で刺殺される。
1860 年 2 月 26 日	オランダ商船の船長ら 2 名（フォス、デッカー）、横浜で斬殺される。
1860 年 10 月 30 日	フランス公使館旗番ナタール（イタリア人）門前で襲撃され負傷。
1861 年 1 月 15 日	アメリカ公使館秘書兼通訳ヒュースケン暗殺される。
1861 年 7 月 5 日	水戸藩脱藩浪士が東禅寺を襲撃（第 1 次東禅寺事件）。
1861 年 8 月 23 日	イギリス軍艦オーディン号水夫、長崎で撲殺される。
1862 年 6 月 26 日	イギリス公使館衛兵 2 名、松本藩士伊藤軍兵衛により殺傷される（第 2 次東禅寺事件）。
1862 年 9 月 14 日	イギリス民間人 4 名、武蔵国生麦村・東海道上で薩摩藩島津久光一行に襲撃され、レノックス・リチャードソン殺害、他 2 名負傷（生麦事件）

しかし、世間は彼らによる外国人殺害を攘夷だと決めつけたのでした。逆にいえば、攘夷という言葉は民衆によって増幅（ぞうふく）された結果ともいえます。為政者の攘夷とは別に、外国人を殺傷ようとする民衆層の暴力行為も攘夷でした。また、攘夷の意味は人によってさまざま、いろいろあったのでした。ただし、被害を受けた外国人にとって、そのような説明はただ迷惑なだけであり、自分たちの生命を保護できない徳川幕府の対応は強く批判されるべきものだったのです。しかも、犯人が逮捕されないジレンマは募るばかりでした。

そうした渦中の 1862 年、島津久光一行が、江戸から京都への帰途、武蔵・生麦村でイギリス人を殺傷する事件を起こします。生麦事件です。この事件では、横浜居留地最大の人数であったイギリス人（スコットランド人）レノックス・リチャードソンほかが初めて被害者となりました。それと同時に、島津久光ら犯人たち（当初は久光の命令とイギリス人たちは判断）が、横浜に近い保土ケ谷宿に滞在していたことから、イギリス居留民は報復行為のため義勇兵団を結成したほどでした。イギリス代理公使エドワード・セント・ジョン・ニールは報復を自重させましたが、事件の賠償をめぐって外交関係が険悪なものになっていきます。

文久の朝廷改革と国事周旋

その後、将軍家茂は再び上洛します。その結果、朝廷が公然たる政治機関として組織されます。朝議には、公家だけでなく武家の代表者が参加し、大政（たいせい）（内政）に関しては徳川将軍に委任されていますが、国家の重要な問題、つまり国事（こくじ）について朝廷で審議することになりました。

なお、その後の歴史のなかで、日本中から武家の代表が集まったかのような恣意的な虚偽が述べられたりしますが、朝議に参加できるのは誰でもいいというわけにはいきませんでした。以前にも述べま

したが、朝廷が上洛を命令した有力な一部の大名（国持大名、名家かつ官位が高いなど）だけが朝議には参加できました。ただし、身分が低くても意見を答申できる方法がありました。朝廷の教育機関である学習院を通す方法です。学習院は公家の子弟教育機関でしたが、その後、政治問題も教育できるようになり、さらに今回の改革で、現実の問題を答申することができるようになっていたのです。

国事審議については、特別に「**国事御用掛**（こくじごようがかり）」**も設けられましたが、ほとんど機能しませんでした。**あえて国事を諮問（しもん）する有力大名もありませんでした。そうしたなか、積極的に国事の朝廷審議に介入した大名家があります。数えるほどしかありませんが、史料的にすべてがわかるわけではありません。

薩摩・長州・土佐や越前などです。さらに、新設された京都守護職に任命された会津（藩主・松平容保（かたもり））や、京都所司代に任命された桑名（藩主・松平定敬（さだあき））がいたようにいわれますが、実態は不明で疑問が残ります。この頃、水戸は藩内が分裂しており目立ちませんでした。水戸出身の藩主を擁する鳥取池田家や、尾張徳川家なども上洛が命じられていましたが、評価は分かれます。ほかに加賀前田家や米沢上杉家なども上洛を命じられていました。

藩経営だけでも大変なのに、わざわざ京都に拠点を設けて活動することに難色を示す大名家は多くありませんでした。にもかかわらず、薩摩や長州、土佐は京都に藩邸を設け積極的に朝議に圧力をかけようとしたのはなぜなのでしょうか。共通していえることはいずれも藩内の権力闘争に朝廷（天皇）の存在を利用しようとしていたことです。薩摩は、前述したように島津一族の藩政支配があり、久光はこれに対抗するために、京都で**国事周旋（しゅうせん）運動**をおこなったといえます。長州や土佐に上級公家との太いパイプがあったわけではありませんでした。長州は、幕閣と昵懇な当時の藩指導層と対立する勢力が、朝廷を利用するため学習院経由でさまざまな建策をおこなうと同時に、若手の急進派公家を懐柔して徳川幕閣を批判させることで、藩の指導層を攻撃しました。極端なのは土佐です。前藩主・山内豊信（容堂）の影響力が大きかったことから、彼が江戸に滞在していることにつけこんで、反対派（現藩主

支持派）が京都で国事周旋運動に参加しましたが、三条実美ら一部の下級公家とのつながりしかなかったので、徳川寄りの公家を暗殺するなどテロ活動によって圧力をかけたのです。

攘夷実行問題と長州藩急進派の行動

そうしたなか問題になったのが、攘夷実行問題です。孝明天皇の叡慮（えいりょ）が攘夷である以上、誰がいつ実行するのかを、一部の公家が恣意的に朝議で問題としました。これは同時に、上洛中であった将軍家茂に対する嫌がらせでもありました。朝議において、まだ少年にすぎない家茂を補佐してくれる幕閣は限られていました。幕閣の多くも上洛中でしたが、官位の問題から家茂に近い場所に着座できるとはかぎりません。そうした状況につけこんで、中高年の公家たちは、かねて徳川幕府が和宮降嫁の条件であった攘夷をいつ実行するのか詰問し、明確な回答がないかぎり江戸帰還を許すべきでないと主張したのです。少年家茂に明確な回答ができるはずがありませんでした。

こうしたなか、特に長州とそれに関係する公家たちが活発な活動をおこなっていきます。徳川幕閣も執拗に抵抗し、攘夷実行期限の回答を先延ばしにしていきます。

攘夷問題を解決したのが、孝明天皇の信頼を得ていた一橋慶喜でした。また、攘夷実行問題に先立ち、生麦事件の賠償金支払いをめぐり、江戸の徳川幕閣は国事にあたると判断して、朝廷に支払い許可を奏上しましたが、急進派公家の画策により、因幡（いなば）（鳥取）や尾張から反対意見が表明されて朝議が紛糾（ふんきゅう）し、他方、横浜港にはイギリスを支持する各国がデモンストレーションのため軍艦を終結させ、イギリスもまたアジア近海の軍艦を終結させていきました。状況は戦争寸前状態です。実際には、横浜が地理的防衛に難があることもあり戦争にはなりませんでしたが、程（ほど）なく、一度は朝議が否決した生麦事件の賠償金が支払われます。これは、一橋慶喜が孝明天皇を非公式に懐柔し、摂政などが支払いを黙認した結果だといわれています。

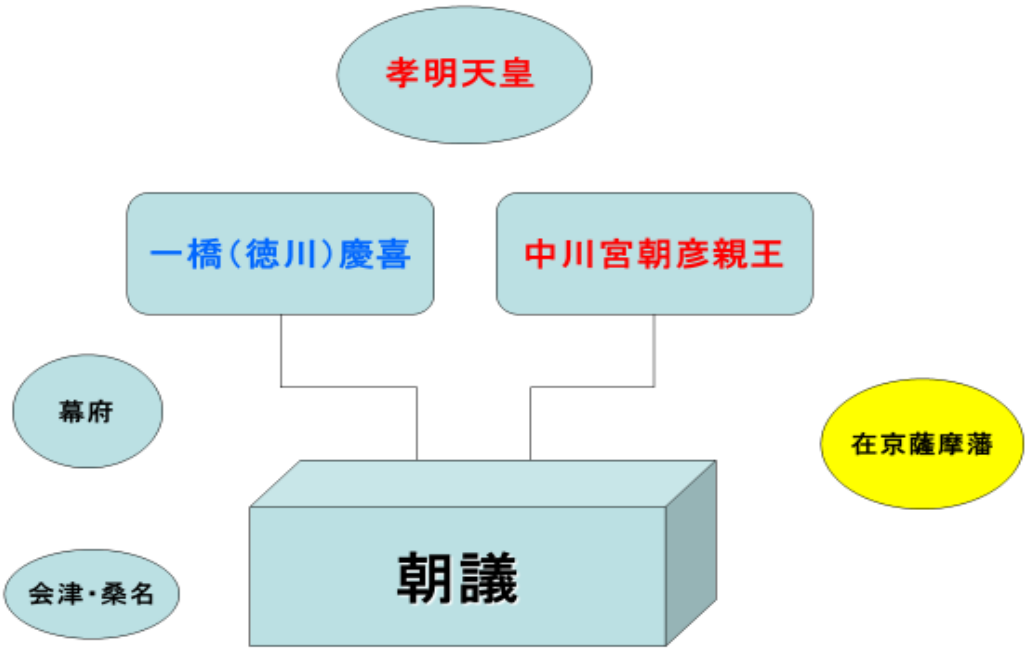
攘夷実行問題に話題をもどします。孝明天皇の信頼が厚かった一橋慶喜は、攘夷実行期限（文久 3 年 5 月 10 日）を一方的に定めて回答したことで天皇の勅許（＝許可）を獲得し、将軍家茂を江戸に帰還させることに成功しました。しかし、攘夷実行などおこなうつもりはありません。朝議における方便（ほうべん）です。これに意図的に反応したのが、長州藩の久坂玄瑞（くさかげんずい）ら激派でした。久坂は長州に戻り、幕府が定めた攘夷実行期限日に、下関海峡を通航する外国船を意図的に砲撃したのでした。ただし、砲撃をうけたアメリカ、オランダ、フランスからはいずれも報復を受け、甚大な被害をだしています。

久坂らは、藩内での立場を失いつつあったことからこうした行動にでたのですが、京都においても急進派は一掃されようとしていました。そして、過激な攘夷論を嫌う孝明天皇の叡慮を実現するとして、京都薩摩藩邸が一橋慶喜と手を結び、これに京都守護職であった会津も加担したことで、軍事クーデタが挙行されたのです。これは、**文久三年八月一八日の政変**と呼ばれ、京都から長州藩が追放され、同時に三条実美（さんじょうさねとみ）ら急進派公家七人も官位を剥奪・追放されました。長州藩士は公家たちを連れて帰国しました。しかし、このままでは藩内で失脚してしまう急進派は、政変がミカドの叡慮ではなく薩摩や会津が仕組んだことだと激怒し、京都へ出兵して孝明天皇に真意を説明すべきと主張しました。結局、反対意見を押し切って京都に出兵した長州急進派は、洛中で薩摩や会津兵と衝突（禁門の変）、結局は敗走することになります。

八月一八日の政変の結果、朝議は一変しました。孝明天皇の叔父にあたる中川宮朝彦親王（なかがわのみやあさひこ）と一橋慶喜が朝議を取り仕切り、建策は必ず両名を通すことになりました。また、攘夷についても、あらためて徳川幕府が実行するとされ、具体的には横浜鎖港（さこう）について条約国と交渉する方針が表明されました。横浜を鎖せば、孝明天皇が主張する下田条約の段階に対外関係を戻すことになるからです。その交渉のために遣外使節を派遣することも合わせて表明されました。遣外使節を派遣して条約国政府と交渉

するには数年の時間が必要だからです。交渉の成功を企図していたかは疑問です。そのうち、公家たちは問題を忘れ、状況も変わるだろうと算段したのです。もっとも、条約内容を変更する鎖港など、条約国が応じるはずもありません。唯一、自国船を下関で砲撃されたフランス政府が、その謝罪使節なら受け容れると表明しました。徳川幕府は、とにかく使節を受け入れてくれれば何でもよく、使節を派遣したのでした。

八月一八日政変後の京都政局



課題（提出方法はこれまでと同じ）　提出期限は、６月５日です。

A　国事御用掛はなぜ機能しなかったのでしょうか。徳川幕閣（および幕吏）・公家・大名（およびその家臣）の職掌をあらためて整理したうえで考えてみましょう。審議するのは「国事」です。職掌がわからなければ辞書などで調べること。

B　「国事周旋」とは、何を意味することになると考えますか。ヒントは文中にたくさん書かれています。「周旋」がわからなければ辞書などで調べること。

C　次頁の史料を読んで答えてください。

これは、徳川慶喜（一橋慶喜）が晩年に家臣であった澁澤榮一の支援を受けた自身の伝記（『徳川慶喜公伝』）編纂のためにおこなわれた座談会の一部です。慶喜自身も参加しています。「公」が慶喜です。阪谷とは、阪谷芳郎、大蔵官僚・東京市長・大蔵大臣などを歴任します。江間とは、江間政発で著名な漢学者です。三上とは、三上参次で東京帝国大学国史学科教授です。また、文中、江間が言及している「東久世伯」とは、東久世通禧、文久三年八月一八日政変で三条実美ら七卿の一人で、長州から太宰府に落ち延びた人物です。王政復古後、明治政府に参画しました。

問題１　「江間」の発言中、黒塗りにしてある箇所にはどのような言葉がはいると思いますか。まったく同じ言葉ではなく、同意表現であれば可とします。

問題２　「公」すなわち慶喜の発言中、青塗りにしてある箇所にはどのような言葉がはいると思いますか。まったく同じ言葉ではなく、同意表現であれば可とします。

江間　一昨々日東久世伯に伺いました。九州の太宰府に四十五年ぶりで行って来たというお話で、今ではもう知っている者はなくなって残らず孫の代である、ただ感慨が深いばかりで、一向昔のことを語るという興味もなかったというお話。だんだんお話を続けまして、あの当時攘夷ということが流行しましたが、攘夷は夷を攘（はら）うということで、何でも眼色の変った奴は、片端から斬殺してしまうというのが攘夷の原則で、攘夷を大別しますと、水戸の攘夷、長州の攘夷、それから天子様の御攘夷と、こう三つと見まして、水戸の攘夷などというものは、私ども考えると本当の攘夷ではない、ためにするところあっての攘夷、あなたはどうお考えなさるかと申し試みましたところが、長州の攘夷もそうだよ、何も攘夷をしたいというわけではない……。してみると攘夷ということは、今日から忌憚（きたん）なく申すと、反対党を叩き潰す[redacted]である、そう言ってもよろしい。しかしその頃の七卿といった三條様はじめ、あなた方七人の方々が攘夷の発頭人（はっとうにん）、それがために長州までも動き、伏見の役などがありましたが、このあなた方の攘夷は、ためにする攘夷でありますか、単純な攘夷でありますか、私ども考えるに、三條様はじめの攘夷は、これは単純なる攘夷で、どこまでも主上の叡慮を安め奉るための攘夷であると思いますが、いかがですかと尋ねました。それは実際そのとおりであったゆえに長州が攘夷をすると言えば、それは飛び立つほど嬉しかった。それから後、馬関でああいうことをしてしまって、京都で失策をして、それからああいうことになって、よく考えてみると、長州の攘夷はためにするところがあったのだ。その事が当時既に分った。我々は徹頭徹尾叡慮を奉じて、攘夷さえすればそれでよいのだと言われまして、大笑いになりました。

阪谷　しかし伊藤公爵や井上侯爵やの話を聴いてみると、馬関の戦争などは、長州が本気の攘夷のようであります。今の攘夷を餌にして幕府に迫ろうとい

うようなことは、あるいは後にはその考えがあったか知らぬが、なかなか馬関の砲撃の時分には、悪くすれば伊藤公爵・井上侯爵、首がないのですからな。

江間　水戸にしましても、末々の者は単純の攘夷ですが、いわゆる操り人形で、その人形使い、すなわち隊長株の心術は、ちと怪しゅうございますな。

三島　何でも打ち払わなければならぬということを、遂には名にするようになってきた。

公　攘夷にも[redacted]もある。

三上　水戸がよほど変っております。

阪谷　条約勅許・開港ということを幕府に迫ろうというところで、幕府が開港論になったから、それじゃ反対に行けということであったが、末流のところは真面目に一生懸命にやった。

（典拠）『昔夢会筆記』平凡社東洋文庫